

個人のころと社会のころ

福島慎太郎 (青山学院大学総合文化政策学部助教)
Shintaro FUKUSHIMA

最近、引っ越しをした。京都から神奈川県にだ。

これまで7年間、三方を山に囲まれた盆地である京都で研究生活をしてきた。暖気や冷気、さらに溜まりこむ湿気とともに醸成される密度の濃い文化に抱かれて、あらためて充実した時間を過ごさせてもらったと感じる。そこでは、四季折々に変化する身の周りの自然と調和し合うように人々の生活が織りなされ、時間はどこかゆっくりと流れていく。それに伴い、自分もふと立ち止まって自らを省みたり、ゆっくりと思索をするゆとりを十分に持つことができた。

そのような中で、この4月に神奈川県川崎市に引っ越しをした。多摩丘陵上に位置するその場所は、平地という平地が見当たらず、あちらもこちら起伏に富んだ地形が形成されている。自転車を使おうものならもの見事に5分間で自転車を降りることとなり、あたりを見渡せばいたるところに坂が目映る。

初めて自分がこの神奈川県の景観を見たのは幼いころ。あたり一面に住宅地と田んぼが広がった埼玉県の平野に生まれ育った自分が、新幹線の窓から神奈川県の丘に形作られた立体的な風景を見たとき、ここでは人々はどのような感覚で生活を送っているのだろう……。と自分の知らない世界に対する不思議な感覚を抱いたことを強く覚えている。思春期のころに観たジブリの映画『耳をすませば』では、主人公が階段や坂を駆け下りる中で展開される臨場感あふれる風景と心の変遷が、とても新鮮に感じられた。丘陵地域で生活してきた人にとっては当たり前のこ



左は神奈川県のとある路地、右は埼玉県の田園風景

となのかもしれないが、日々穏やかに稲穂が見守る一面の平野の中で、空の上をゆっくりと歩行する太陽と足並みを揃えて生活してきた自分にとっては、自らの行動に伴い上下左右に次々と表情を変える街並みから得られる体感はとても新鮮なものなのだ。幼少期から自らを取り巻く環境とともに形成されてきた平坦で境界が低い心に、その起伏に伴う凹凸の深い陰影を映し出す場面を数多く提供してくれるのではないか、という高揚感を体内に感じながら、新生活が始まった。

これまで大学院から研究員時代にかけて、人々を抱く地域という場所の魅力に惹かれながら、社会学と心理学の中間領域で研究をしてきた。ここでは、個々人の心が持つ個性とともに、その心に纏われた地域の環境を捉えようとする。いわば、個人を通して自然や社会、さらには個人と環境の総体としての風土や文化に触れる、というのが研究手法となっている。私は私であって、埼玉人であって、日本人であって……。という多層的な心（同時に場）との対話を

試行するのである。そしてその際、それぞれの場に身を置き生活をしている人たちの心と対話するのは、何を隠そう研究者本人の心となる。その対話を繰り返しながら、現代社会で育まれた心たちを固有の切り口から描き出していくのであるが、対話相手である研究者の心は、これまた何を隠そうそれまでの本人の身の置き方・生き方に依っている。

これまで京都で素晴らしい仲間・温かい心に見守られてきた。このことが、現代社会の心たちとの対話相手としての、そして社会に対話成果を還元する表現主体としての自分の心にとっての何よりの財産。今後、どのような風土や文化に身を置くことになるかわからないが、これまでに出会ってきたかけがえのない仲間との経験をいっぱい含みこんだ心ひとつで、身をもって新たに出会う人たちと対話をしていきたい。そして、社会科学における対話相手としてと同時に、実践的に自らの心・場を体現する主体として、日々誠実に生きていきたい。